作文　中学生の部　最優秀賞

小耳症の自分ができること

中学三年　梶原　悠生

小耳症の自分ができること

中学三年　梶原　悠生

「外耳道形成手術で右耳に穴を作り、鼓膜を皮膚移植。一方で、餃子のような形の耳を切除。次に胸の骨から切り出した軟骨の一部を、左耳の大きさに合わせて、右耳の形に加工し、右耳の位置に埋め込む。そして耳の軟骨がうまく皮膚になじんだ一年後に、二回目の手術で周囲の皮膚を切り、右耳として立ち上げる」。

これが、僕が医師から言われた右耳の治療法です。僕は生まれつき小耳症と呼ばれる病気で、右耳が奇形で、右耳の穴がふさがっていて、右耳は音が聞こえません。でも左耳は聞こえるため、日常は普通に生活できています。小さい頃は、見た目が原因でからかわれることもあり、鏡の前で自分の顔を見て、泣いていることもありました。そんな中、ｇｉｇａスクール構想の影響で、学校からタブレット端末を貸与されたタイミングで、父から、「小耳症について調べてみて、自分の生き方のヒントを見つけてみては」と何気なく言われたことがきっかけで、全国にいる小耳症の人たちがどう生き抜いているのかインターネットで調べたことがありました。そこで知ったのが、〝義耳〟という本物そっくりのオーダーメイドの耳を装着するという対処法でした。透けるような色で、毛細血管にまでこだわった作りの耳で、現在は技術がものすごく進歩しているそうです。義耳を作っている会社は国内にいくつもあり、義指や義手、人工乳房まで本物そっくりに作り上げていて、それを利用している人たちは、自信を取り戻して、日常を明るく生きていることを知りました。

僕は、〝コレ〟だと思いました。僕のように現代の医療技術で回復できない人たちに生きる希望を与えられる義肢装具士として働いてみたいと思うようになりました。そこで、将来、どういった学校で勉強できるのか、さらに調べていくと、国内にある医療福祉の大学では発展途上国の病院と義肢装具の分野で国際交流、国際協力をしていることが分かってきました。これは、義肢装具分野の後発国、いわゆる発展途上国では、

見た目での差別や、健常者との差別で苦しんでいる人たちが大勢いることの裏返しだということも分かってきました。日本だけでなく、そういった人たちに〝生きたい〟と思ってもらえる、世界で活躍できる義肢装具士に興味があります。言葉も学ばなくてはいけません。英語だけでなく中国語やポルトガル語などを学べば、活躍できる国も広がるし、患者との距離感もぐっと縮まると思います。世界中のすべての人を幸せにする力は、中学生の僕にはありません。でも僕にできること、小耳症の僕だからこそできること、気づけること、助けたいと思える人がいます。自分の足下を見つめて、できることからやっていきたいです。この文章を書いている時でも僕の住む富山県の隣、石川県では多くの余震が続き、がれきや家屋の下敷きで手足などを怪我した方がいるとも新聞で知りました。命あってこそとは言いますが、命が助かってからの人生もまた長いと思います。自分の力が、そういった人たちの支えにもなってほしいと思います。自分の暮らす富山から、日本へ。そして日本から世界へ。自分の思いと夢を広げていきたいです。

作文　中学生の部　優秀賞

世界中の人が幸せになるには

中学一年　塚田　暖

世界中の人が幸せになるには

中学一年　塚田　暖

幸せの社会とは、お互い尊重をすること、多様性を肯定すること。また思いやりをもち人と人とが認め合い、助け合い、支え合いの関係を築くこと。格差のない平等な社会、平等、正義、安全を重視する、などの様々な意見があることを、私はこれまで知りました。私自身の幸せな社会のイメージは、幸福、喜び、笑顔、希望、温かさがあふれているような社会だと思っています。しかし、世界にはいまだに紛争や飢餓によって苦しむ人が多くいることを、小学校のユニセフの活動で知る機会がありました。肌の色によって、すむ場所、学校、仕事など全てにおいて扱いが分けられ、差別によって、たくさんの人々が理不尽に死んでしまった時代があったという事をも私は知っています。現在でもアメリカで白人警察官が大した捜査をすることなく、たまたま近くにいた黒人の少年を犯人だと決めつけ、その少年を逮捕したというニュースを見ることが何度もあります。この行為は、黒人は犯罪者であるという根深い思い込みから起きたとてもひどい行為であると、毎回辛い気持ちになります。国内でも、家の事情で食事をきちんととることができず、コンビニのおにぎりだけの食事や、給食でしか栄養のある食べ物を口にできない子ども達がいます。

また、性的マイノリティーの人々は学校の制服で自分の性別に合わない服を着ることになったり、公共のトイレを利用するたびに気を使わなければならないこともある環境にいます。このようなことが世界で起こり続ける限り、幸せな社会は訪れないと思います。私は今、食事がしっかりでき、学校で教育を受け、誰かに差別されることもありません。家族と友達と楽しく過ごし、自分がしたいと思う事に向かって自由に行動できる幸せな環境にいます。しかし、このような幸せを、自分だけでなく、他人にも広げるにはどうすればいいのかと私は悩みました。なぜなら、幸せの考え方は人によって異なると思うからです。休日に友達とわいわい楽しみたい人、一人でゆっくりしたい人、便利な都会の高級マン

ションに住みたい人、と様々です。国や宗教が違えば、その考えはきっともっと増えます。

そんな時に、社会技術センターという社会が直面する問題を解決するための研究開発をしている機関の記事を見つけました。他人に幸せを繋げるためには、「幸福感・信頼感・社会活動」を循環させることが必要であり、大切なのは、何が幸福感の要因かではなく、三つの要素が常に循環している状態である。また、他にも「自己実現と成長・つながりと感謝・前向きと楽観・独立と自分らしさ・これら四つが幸福感の素である。」という事が書いてあり、とても納得しました。幸福を得るためには、何か物が必要なのではなく、成長やつながり、前向きな気持ちや自分らしくいられるなど、多くの条件が揃わなければならないのです。私は冬休みに日本と韓国の人が協力して、東南アジアの識字率の上昇を積極的に支援しているという団体ボランティア活動に参加しました。参加する前は、食料や本、勉強道具などを送ったりしているかな、と思っていたのですが、その団体では貧困に苦しむ東南アジアの現地に行き、学校を作り、農業のやり方や井戸の作り方などを教えることを継続的に行っていると聞きました。まさに、現地の人が日本と韓国の人とつながり、成長して、自分の得意なことで独り立ちするための活動でした。私が行ったのは、寄付をしている人たちに感謝と現地の様子を伝える手紙を送ることでした。それだけでも、この活動に関心を持っている人がとても多いことが、わかり驚きました。また、寄付されたお金が学校の教室の賃貸料や働いている先生の給料、学校運営に関わる様々な費用に使われていることもしっかりわかる様になっていました。

この経験を通して、幸せについて知ることは大切だと思いました。今の私にできることはボランティア活動や募金など、多くはないですができる事を増やすために、知識を増やし、勉強もしていきます。これから私はさらに、相手が考える幸せについても想像しながら、行動したいと思います。世界中の誰もが、自分と相手の幸せについて努力し、一人一人が自分らしい幸せを手に入れた時、そのカタチは様々で同じものは一つもないでしょう。私は、それらがまとまった世界の幸せのカタチは複

雑でどこから見ても異なっていて、美しく輝いていると想像します。

作文　中学生の部　優秀賞

ありがとう

中学一年　井上　彩音

ありがとう

中学一年　井上　彩音

幸せとは何か。

世界の幸せをカタチにするためにはまず、幸せとは何かを知る必要があると思う。

昨今、ニュースで流れてくる戦争の話題。画面に映し出されているのは無惨に崩れた建物や、傷ついた人々。大人も子どもも、笑顔を忘れた悲しい表情をしている。そんな悲惨なニュースを見ながら、私は母が作ってくれた温かいご飯を食べる。

戦争の話題が出るたびに、私は日本に生まれて幸せなんだと思ってしまう。

幸せだなんて思ってはいけないかもしれない。だが、今こうして温かいご飯を安心して食べている間にも、空爆を恐れ、家族の安否を心配している人々がいると思うと、日本に住んでいることは幸せだと感じてしまう。

そこで私は、ふと思った。大変な境遇な人を見るまでは、私は当たり前に過ごしてきた日常が、幸せなことには気づかなかった。

つまり、幸せは不幸の上に成り立っているのだ。不幸だと感じなければ、幸せだと感じることができない。逆に言ってしまえば、当たり前だと思ってきた日常から、何かが欠けてしまえば、幸せでなくなってしまう。例えば、おいしい夕飯を食べられるのは、両親がいるから。もし両親がいなかったら、どうなってしまうのだろう。きっと心も体も飢えてしまうだろう。このような状況、とても幸せとはいえない。

幸せとは、積み木のようなものだと私は考えた。幸せは、「当たり前」という積み木が重なり合ってできている。そこからさっきまで普通に支えていた積み木が一つでも無くなってしまうと、バランスを崩し、最悪の場合すべて崩れてしまう。そして今まで普通に支えていたのは奇跡だったと気づく。つまり幸せとは、普通にあると思っていた「当たり前」はひどくもろく、「当たり前」を過ごせていたことが幸せなのだと気づ

かないことだ。

今まで私が過ごしてきた時間の中に、気づかなかったたくさんの幸せがあるのだ。そして、その幸せを誰かのために「カタチ」にする方法はたったひとつ。それは、「当たり前」を当たり前だと思うのではなく、この「当たり前」を過ごせていることに感謝の気持ち、「ありがとう」と思うこと。そして、「ありがとう」という言葉の「カタチ」にして伝えること。とても単純で、誰にでも言える言葉。このたった五文字の言葉が、私と誰かを繋げ、幸せを「カタチ」にしていく。

「ありがとう」という幸せの「カタチ」を誰かに伝えることで、相手の中に幸せの「カタチ」が作られ、そしてそれをまた誰かに伝えることで、幸せのループができ上がる。

だから私は、世界の幸せを「カタチ」にするため、「ありがとう」を忘れずに、誰かの居心地のいい「当たり前」を築いていきたい。

作文　中学生の部　審査員特別賞

君の代わりには誰にもなれない

中学三年　山口　南子

君の代わりには誰にもなれない

中学三年　山口　南子

小さい頃から歴史人物の一生に興味があり今まで何冊も伝記を読んできたが、その中でも記憶に残っているのがガンジーという人物である。ガンジーはインドの社会運動家であり、暴力を使わずにインドの独立を目指し、人種差別と戦った人物だ。しかし、ガンジーがインドの独立に成功しても争いは消えなかった。インドにはヒンドゥー教とイスラーム教があり、二つの宗教が対立していたからだ。それぞれの宗教を信じる人々は一緒の国になることを嫌がった。ガンジーは「断食」をして訴え、インドの人々は目を覚ました。しかし、二つの宗教が手を取り合おうとすることを反対するヒンドゥー教徒にガンジーは暗殺されてしまったのである。

二つの宗教の対立と差別は今も続いている。さらに、インドには過去にカースト制度もあった。今は憲法でカースト制度は禁止されているがインドの人々には制度が根付いており、習慣として残ってしまっている。

私は暴力ではなく、言葉や行動で示したガンジーの行いに心を打たれた。戦争や紛争はどうして話し合いで解決できなかったのか、何故武力を行使して争い続けてしまうのか。世界は自分の意思を曲げようとせず、自分勝手だと思う。暴力では何も解決できない。ただ、戦いに敗れる人がいて、家族を失ってしまう人がいて、食料や住む場所さえ無くなってしまう人を作るだけだ。そんなことをして誰が幸せになるのだろうか。

ガンジーの意見に賛成する人は多かったが、全ての人が肯定的というわけではなかった。全ての人が納得する答えなど無いのだ。だから反対する人もいるし、意見が違う人がいる限り争いは無くならないと思う。戦争も「国」が違うから自分の国を守るために戦う。人間が分かりあうことは難しい。考え方も見た目も人それぞれだ。それでも世界の人々が幸せに暮らすために差別はあってはならないことである。仲良くする必

要は無い。ただ、お互いを尊重し合えるような世界になって欲しいと私は思う。差別がなくなるためにどうすればいいか、まずは差別について理解を深めることにした。

差別は「差をつけて区別する」という意味がある。主な差別の原因は「性別」「出身」「文化」が違うことで起きる。日本にも人種差別や性差別、障害者などがある。

小学校の時に中国と日本のハーフの同級生がいた。低学年の頃、その子は同級生の男子の何人かに「チュウゴクジン」と呼ばれていた。幼かった私はそれに何も思わなかったが、今思えばあれは自分達「日本人」とは違う人間という扱いだったので一種の差別だったのだ。あの時のハーフの子は何を感じていたのだろうか。クラスが違い関わりが無かったためその子がどんな思いだったのかは分からなかった。ただ、私が外国で暮らしていたとして、周りの人に「ニホンジン」と呼ばれていたら、その呼び方よりも名前で呼んで欲しいと思うし良い気持ちにならないと感じた。その時「チュウゴクジン」と呼んでいた男子は差別をしているという意識はなかったのかもしれない。だが、「幼いから仕方ない」「差別だとは知らなかった」という理由では許されないことだ。このように自覚はなく差別をしている人が他にもいると思う。それが無くなるためにも一人一人の意識を改めていくべきだと考えた。

世界が幸せになるには、「人間は一人一人が全く別の生き物だ」という意識を持つことが重要だと思う。「十人十色」ということわざには「人はそれぞれ好みや意見が異なっている」という意味がある。このことわざのように、この広い世界の中で自分と同じ人間は一人もいない。今まで経験したことも、考えていることも全部自分だけのものだ。違うところを認め合えれば差別も無くなり、世界は良くなっていくだろう。しかし、全員が意識を変えることはとても困難だ。全ての人が差別をやめることは難しいかもしれない。それでも、それぞれの個性を大事にしてほしい。誰かに否定されたとしても変わらなくていい。君は一人しかいないんだから。

作文　中学生の部　審査員特別賞

一隅を照らす

中学三年　ペンネーム　Sou Sou

一隅を照らす

中学三年　ペンネーム　Ｓｏｕ Ｓｏｕ

「世界の幸せをカタチにする」ということを考えてみたら、スケールが大きすぎて想像がつきませんでした。

まずは「世界の幸せをカタチにした人」にどんな人がいたかを考えてみました。ぱっと浮かんだのは中村哲さんです。僕は中村哲さんが銃撃で亡くなったことをテレビのドキュメンタリー番組で知りました。僕は小学生でしたがとても印象に残ったことをおぼえています。

中村哲さんは日本の医師でパキスタンやアフガニスタンで医療活動に従事してました。現地では干ばつが続き、水がなく子供たちは泥水を飲んでいました。それで病気や感染症にかかる人達が増えていました。中村さんは「水があれば多くの病気を治せる！」と考えまず井戸を掘りました。しかし井戸がかれ始めていることに気づき、アフガニスタンのクナール川から水を運び村に届けるガンベリー砂漠までの25キロのマルワリード用水路を作り、現地の農民の生活基盤を作りました。

これが「緑の大地計画」です。中村さんのすごいところは、何の経験も知識もなかった用水路をつくるということを一から勉強し、苦手だった数学の勉強を高校生の娘さんの数学の教科書を日本から送ってもらい勉強しなおしたそうです。

内戦紛争の激しいアフガニスタンで危険な状況にあいながらも、何度も失敗をしてもあきらめずに用水路を作り続けて完成させました。たくさんの日本人や現地の人たちがかかわってできた用水路。完成式で川から流れていく水と一緒に子供たちが嬉しそうに水の流れを追いかけていく様子をみている中村さんの嬉しそうな表情がとても印象的でした。それから用水路が通ってから何年後の様子がテレビに映し出されていました。砂漠だった場所に作物や果物が育ち、水をくむ人々の様子、笑顔がみえます。大地が茶色ではなく緑色になっていました。この用水路のおかげで、65万人もの人が食べ物や水に困らなくなり助かったそうです。当時の映像で中村さんはまだまだ「緑の大地計画」は続くと言っていま

した。中村さんの亡くなった今も、用水路は現地の人たちが作り続けているそうです。

中村さんがよく言っていた言葉で「一隅を照らす」という言葉があります。これは今僕ができることの世界の幸せをカタチにする一歩に通じる言葉です。僕は今、特に自信もってできることや得意なことが特にあるわけではありませんが、好きなことはたくさんあります。物造りや絵を描いたり、建築物を見ることが好きです。数学は比較的得意で、図形や計算が好きです。例えばこんな僕ができそうな仕事、建設にかかわるデザインや設計、橋や道を作る。日本らしい公園を世界につくるなんて夢が膨らみます。この僕の小さな妄想や小さな好きや得意をこれから大人になるまで積み重ねていけば、なにか人の役にたったり、自分や周りの人を幸せにしたりする事が、できるのではないかと思います。

今、僕にできることを小さなことからやっていく。それが勉強することや、本を読むこと、友達と話をすること、ごみを拾うこと。小さなことだけど「一隅を照らす」気持ちを大人になっていくと同時に忘れないように持ち続けたい、これがいつか世界の幸せをカタチにすることにつながる一歩だったらいいなと思いました。

作文　中学生の部　審査員特別賞

幸せについて考えてみた

中学二年　髙岸　蒼以

幸せについて考えてみた

中学二年　　髙岸　蒼以

日本は世界一安全な国と言われています。戦争もなく、経済的にも恵まれていると言われています。しかし、世界の幸福度で調べると、日本人は自分を不幸と思っている人が多いそうです。日本はなぜ幸福度が低いのでしょう？例えば今いじめを受けている人は、自分を幸せとは思えないでしょう。経済的に困窮している人が、幸せを感じることは少ないでしょう。ブラック企業に勤めている人は、「幸せ何それおいしいの？」という状態かもしれません。結局のところ、幸せというのは個人的な感情に左右されるものなのです。

どこかの県で、子どもたちが遊ぶ声がうるさいという苦情から、公園がなくなってしまうニュースを見ました。ではその公園を何か別の施設にしようとなったら、その工事音がうるさいと苦情が出たのだそうです。このニュースを聞くと、なんて人間は勝手なんだろうと思いますが苦情を入れた一人一人の背景を考えてみると、もしかしたら子供が欲しくてもできなかった人が子どもの声を聞くことに耐えられないのかもしれないし、とっくに子育てが終わった人が子どもから見返られることなく、寂しく暮らしているのかもしれません。夜間のお仕事をしてるため、昼間の騒音は辛いのかもしれない。病人や、介護をしている方は騒音が辛いのかもしれない。また、子どもがいる家庭では子どもが遊ぶ場所がなくなって大変不自由しているだろうし、この国は子どもを育てにくい国だと思っていることでしょう。お互いを理解するのは、非常に難しい。

人は、誰かに迷惑をかけて生きている生き物です。家でずっと仕事をしている人も、誰とも関わらず命を保てる者はいないのです。私は、一人一人がもう少しだけ他者に対して寛容になれば、幸せになれるのではないかと思うのです。日本人は、真面目で勤勉だからこそ、他人に対してとても厳しいと思います。人の失敗や、人の欠点を「そういう人もいる」と受け入れる心が小さいと思うのです。もう少しだけ心を広げられれば、自分が今持っている幸せに気づきやすいのではないでしょうか？

おいしいお菓子を食べた時、親友と遊んでいる時、アニメなどの趣味を満喫している時、そんな時に私は幸せを感じます。そんな私のことを気楽な子どもでいいなと思う人たちも多くいるでしょう。ですが、私だって苦労してるんです！子どもだって大変なんですよ。人はみな誰かと比べて自分の幸不幸を計ろうとします。しかし本来それは比べるものではないのです。だから私は、私から見てずっと幸福だと思う人がすごく辛い思いをしていたり、私より不幸そうな人が私よりずっと幸せだと言ったとしてもただそうなんだ、と相手の心に寄り添える人間になりたいです。そして相手の心に寄り添うことができる自分は、その時幸せなのだと思います。

作文　中学生の部　審査員特別賞

マイハッピーデイ

中学二年　前澤　瑠伽

マイハッピーデイ

中学二年　前澤　瑠伽

私は、「世界の幸せをカタチにする。」というテーマから、幸せという概念の中でも、「日常の幸せ」と「非日常の幸せ」について注目しました。

まず、「日常の幸せ」とは、家に帰ってきてからの自由時間やご飯を食べること、家族と過ごす時間、睡眠時間などがあります。反対に「非日常の幸せ」とは、遊びに行くことや趣味をする時間、旅行、贅沢する時間などがあります。

もし、毎日が「非日常」のような過ごし方だとしたら、最初は幸せな時間を過ごせるかもしれませんが、長く過ごしているうちに、「非日常」が「日常」に変わり、それが当たり前になり、幸せを実感できなくなります。

私は、幸せとは「実感すること」が重要だと思います。つまり幸せは、実感しなければ幸せが存在しないと思います。そのために何ができるかを考えました。

私の家では、お誕生日の人がお誕生日当日に何をしたいか家族に提案します。そこから「マイハッピーデイ」という国民の休日を作るという案が思い浮かびました。例えば、国民の休日の中でも「父の日」や「母の日」がありますが、それがあることによって、父や母に感謝を伝えるきっかけとなります。ですが、それがなかったら、父や母に感謝をいつ伝えればいいのかわかりません。そこで、同じように「マイハッピーデイ」という自分の幸せとは何かを考える日を作ることによって、改めて自分の幸せについて考えるきっかけになると思いました。自分にとって何が幸せだと思うかは人によって違います。なので、その日は、自分の幸せについてを自分自身で改めて考え、幸せであることに感謝をする日にすると良いと思います。その日は、みんなが好きなことをするので経済効果も期待できると思いました。それによって、日常の中に幸せを感じる人、非日常の中に幸せを感じる人、また、日常があることによって、非日常の幸せが感じられる人、そして、何からも幸せを感じられない人

など自分自身を知るきっかけになると思います。そして、自分の幸せに気づいた人は、周りを幸せにできるとより幸せが相手にも自分にも広がると思います。

幸せとは、世界中の人が共通しているのではなく、人それぞれ違うものだから、自分自身で気づかなければなりません。しかし、自分の幸せだけを主張し、人に不幸を招くようなことは、いけないことだと思います。世界中の人がみんな幸せになるのは難しいかもしれないが、一人でも多くの人に自分自身の幸せを見つけてほしいです。

作文　中学生の部　審査員特別賞

世界が幸せになるために

中学二年　嶺崎　珠子

世界が幸せになるために

中学二年　嶺崎　珠子

世界の幸せとは何か。世界にはたくさんの問題があり、すぐに解決するのは難しいと思う。世界にある問題の中で、私は難民問題について興味を持った。身近に悩んでいる人もおり、母ともよく話をしていた。難民問題は私の中で大きな問題だ。なので私は、難民申請がすぐ通る世の中こそ、世界の幸せへの第一歩だと考える。

日本の難民認定率はわずか二％。他国と比べても、極めて少ないと言える。二千十一年から二千二十年の間で百十七人が申請したものの、難民申請が認められた人はわずか二十二人だった。これだけ認定率が低いのには、いくつか理由がある。一つ目は、個別把握論だ。これは、本人が個人的に狙われていなければ難民ではないという日本独自の解釈だ。主にこれが、難民認定されるべき人の範囲を極端に狭めている。この条件だと、アンネ・フランクも、日本では難民申請が通りません。何故なら、迫害されているのは「アンネ・フランク自身」ではなく、「ユダヤ人」だからである。私の知り合いで、難民申請のため日本に来た人がいたのだが、彼女たちは結局難民申請が通らなかった。八年日本にいた。彼女たちの宗教が母国で迫害されていても、彼女たち自身は狙われていないからだ。その後カナダではすぐに難民申請がすぐに通ったそうだ。そして、彼女たちは「カナダの方が早く難民申請が通るなら、初めからカナダに行っておけばよかった」と言っていたそうだ。私はそれを聞き悲しく思った。そして、彼女たちの母親も同じく、難民申請を受けるため長年日本にいた。しかし難民申請をしている最中の人々は、病院を受けられない。保険証がないからだ。十割負担か、行かないか、の二択である。彼女たちの母親は日本にいる間に体を壊した。しかし、日本では病院を受けられなかった。もう限界だと感じ母国に戻った時には、医師に「なぜもっと早く来なかったのか。もう手遅れだ」などと言われたという。彼女は、病院に行った日の一ヶ月後、亡くなった。カナダに初めから行っていれば、彼女たちの母親が亡くなることもなかったのだ。どれほどの

後悔がのこるのか。人生のうちの八年はそう長くないのかもしれないが、それでもただ難民申請のためだけの八年と考えればかなりの時間である。その上、カナダではすぐに難民申請が認められた。私だったら、すぐこの八年何だったのかと考えてしまう。二つ目は、審査自体がフェアかどうかだ。難民申請では中立的な通訳者が用意されておらず、証拠書類は日本語での提出が求められている。また、十分な資料を集めなければならないのも自分である。自国からやっとの思いで逃げたとき、その証拠になるものを持って逃げることができる可能性は少ない。その上、申請者が証拠資料を自力で翻訳できる日本語力を持っている場合は極めて稀である。仮に私たちが難民申請をしなければならなくなった場合、母語ではない言語で書類を書けと言われても、できないのではないだろうか。翻訳機を使ったとしても、その翻訳があっているか私たちには分からない。そして、土台にも大きな問題がある。例えば、日本が難民をより積極的に受け入れる、という政治的意志がないことだ。これは重大な欠陥だと思う。しかし難民に対してどこまで門戸を開くか、政治的決断が求められる。また、社会で難民問題に関心を寄せる人が少ないことも原因だ。何故ならもし国民の難民問題への関心が高かったら、政治の場で重要事項として取り組まれるはずだからだ。難民を治安悪化や社会のリスクとつなげるなど、根拠のない誤解や偏見が、政治の場での取り込みを渋滞させる後ろ支えをしていると言えるかもしれない。

難民問題は、普通に日本で生きていてもあまり知ることがない問題だ。だからこそ、私たちが難民問題に対して関心を高めることが重要な一歩だと思う。私は、幼い時から彼女たちと関わりを持っていたし、母親から彼女たちの問題について聞かされてきた。それは世界が言う普通ではないかもしれない。しかし、そのように幼い頃から難民問題について理解し、問題について解決するという意志があることは非常に重要だと私は考える。小学校の道徳の授業などで、この問題を取り扱うことができれば、日本の子供たちはこの問題について積極的に解決しようとするだろう。このようなことから、小学校で難民問題や日本と外国人の関わりについて教えることが世界の幸せにつながると思う。